『教育工学』１９６８年７月（発行元不明）

教育工学は何をなすべきか

教育工学という言葉が流行し出した。標語が流行するのは、日本の教育界の特色の一つとされてきた。教育工学という言葉も、またそのような流行語の一つとして消えてなくなる言葉なのであろうか。言葉が消えてなくなるのは一向かまわないが、その実体がなくなるのではこまると思う。流行ではこまるのである。

思うに言葉の流行が次々にあらわれるのは、その実体がしっかりと定着しないからであろう。実体が定着してゆくというのは、教育の研究のいとなみや開発の事業が、日本の教育の現実の中で進行してゆくことである。その事実があれば、一時の流行に終わるということはないであろう。

わが国の教育学のお家風は紹介学風であり、文献学風であり、註釈学風である。今年は明治百年といわれているが、この百年間、わが国は近代教育の導入に努力してきた。それはほとんど先進諸国のつくりあげたものの技術導入といってよい。そこに紹介学風の教育学が成立してきた理由がある。しかし教育の実体を進歩させるものは、自らの実践である。その実践の中から次の進歩を自主的に生み出す。これが本質的な発展である。研究とか開発とかは、そこに位置づく。したがって研究開発の目が向いているのは、自分自身の実践に対してでなければならない。

ところがわが国の教育学は、そういう実践的現実に目を向け、究明の手をのばすことをしなかった。あるいはきわめて少なかった。そうして外に対してのみ目が向けられているところに、次々にと流行現象を生み出す所以があるのである。しかし、いくら流行しても本体はかわらない。わが国の教育が形の上で近代的なものをもっているけれども、その根底にあるものの考え方や、構造の点で近代的ならざるものを多くもっているのは、以上のような理由によるのである。

教育工学も現在のところ、紹介学風の所産といった傾向がある。外国でおこなわれている研究の紹介や理論の序述や機器の紹介などが主な動きである。もし、そのような傾向だけでこのまま続いてゆけば、これもまた流行に終わるおそれなしとしないのである。

問題は現実に対して、どれだけ実証的にアプローチし、どれだけ実践的に実体を切りかえる努力をするかということである。外国でもいわれているように、教育工学は教育に対する新しい哲学を根底にもっている。そういうものが生まれてきたのは近代生活の発展によるものであるが、わが国では、わが国なりの新しい哲学による教育の体質改善のいとなみがあるはずである。われわれのもっている教育の実体を分析し、改善の方向を追求し、新しいものをつくりあげてゆく努力をしなければならない。そういう動きの中に教育工学が生きてゆく、教育の体質も改善されてゆく。

教育工学というものがどこかにあるのでなく、われわれの教育革新のいとなみの中から教育工学は生まれるのである。教育工学という言葉が印象づけるように、教育に新しい機器を導入するということだけがわれわれのなすべきことではない。古い考え方、形の中へ機器が導入されても、かえって、教育がゆがめられることもないわけではない。問題はそういう末梢的なところにあるのでなく、われわれのもっている教育の弱点、欠陥を分析し、実践的に体質改善をはかってゆくことである。そこに教育工学の育ってゆく地盤があるというべきである。

矢口　新